

【第45回城戸賞 応募作品】

上辺だけの人

三嶋龍朗

【あらすじ】

若くして有名脚本家となった安達博巳（35）は、女優の麻里（32）と結婚して十年目を迎えるようとしていた。おしどり夫婦と目される二人だったが、その実、その関係は破綻寸前だった。何かを隠すように上辺を取り繕う博巳の態度が麻里を苛立たせ、口論が絶えない。あげく麻里から「あなたのことわからない。心がないみたい」と言われる始末。

近年は、過去作の焼き増しのような脚本ばかりで仕事も減っていた。やっときた映画脚本のオファーも、麻里が主演を務めることを条件としたもの。麻里には隠したまま、その脚本のプロットを書く博巳だったが、題材が夫婦ものであるため普段以上に書くことができない。

そんな折、かつての恋人であるケンジから電話がある。「エイズを発症した。あなたも、すぐにHIV検査をして」との連絡。若い頃、売れずにくすぶっていた博巳は、年上の男性に、ヒモとして養ってもらっていたのだった。その過去については、周囲は当然、麻里にも隠していた。

すぐに検査を受ける博巳。結果は陰性。胸をなでおろす博巳は、ケンジの元を訪れる。当時はゲイバーを複数経営し羽振りよかったが、今は見る影もないアパート暮らし。咳が止まらず熱もあるケンジは、検査はしたものの治療は開始していないという。すぐに病院へ連れて行く博巳は、ケンジに感謝される。

自宅に戻った博巳は件のプロットを書き始める。『離婚した元妻が病気となり、そのケアをする夫』という夫婦の話。ケンジとのことをネタにした話だったが、プロデューサーの感触はすこぶる良い。

博巳は取材を兼ねて、ケンジの病気のケアをするようになる。そんな思惑があるとは知らないケンジ。

そんなある日、精密検査で、H I Vの合併病である悪性腫瘍が発見されるケンジ。一方で、プロットの不切も迫り、ケアの両立が難しくなり始める博巳。家を空けることが多くなつた博巳を不審に思う麻里は、博巳が隠れてケンジのケアをしていたことを知る。過去に同性と交際していたことも含め、ショックを受ける麻里。その様子を受け、もうケンジとは会わないと約束する博巳。しかし、麻里はケンジのケアを手伝うという。

【登場人物】

安達博巳<sup>ひろみ</sup>（33）脚本家  
安達麻里（32）女優。博巳の妻

芸名…伊吹麻里

大塚ケンジ（51）博巳のかつての恋人

堤有紗（25）麻里のマネージャー  
吉岡（43）麻里の専属メイク

高野（27）新人脚本家

後藤（41）映画プロデューサー  
箱崎（29）後藤の部下

平山（52）エイズ拠点病院の医師



博巳「（その空席を見ている）……」  
司会「今回の脚本に一目惚れして出演を決められたというのですが、特にラストシーンがお気に入りで、主人公が最後、彼女を追いかけたのかどうか今もすごい気になって。監督は現場でも教えてくれないんです」  
監督「（笑って）それは脚本の安達さんに訊いたほうがいいですよ」  
麻里「（博巳を見て）私は、追いかけてほしいって思うんですけど」  
博巳「……」  
博巳「博巳は聞いていない様子。」  
麻里「あの、安達さん？」  
博巳「空いた席を見ている博巳。依然ひとつだけ」

○授賞式会場・控え室（十年後）

ノートPCのキーボードに指を置いたまま固まっている正装姿の博巳（35）。映画プロット『夫婦（仮）』という題名だけ書かれた真っ白なワード画面。少し指を動かしてみるが、一文字も打てない。ノック音がしてスタッフが入ってくる。スタッフ「奥様の御仕度がおわりましたので、舞台袖までお願いします」  
立ち上がる博巳はPCを畳む。

○授賞式会場

マスコミがひしめく会場。舞台には『いい夫婦の日』ベストオブいい夫婦』という看板が飾られている。

○同・舞台袖

博 已と麻里が舞台袖で待機している。  
 司 会の声「それではご登壇いただきましょう。  
 脚 本家、安達博巳さん、女優、伊吹麻里さ  
 ん、ご夫婦です。拍手でお迎えください」  
 フラッシュと拍手を浴びながら登壇する  
 博 巳と麻里（32）は、ここに取材陣  
 の前で横並びになる。  
 主 催者表彰状の授与。  
 表彰状の授与。夫婦は、お互いに慎みと  
 思いやりの心をもった理想的な夫婦と選出  
 されましたので、ここにその栄誉を称え、出  
 表 彰いたしました。表彰状を渡される二人。  
 主 催者から表彰状を渡される二人。  
 博 巳「受賞のスピーチを行って博巳。  
 受賞のスピーチを行って博巳。  
 博 巳「映画の主演を麻里さんが務めてくれまし  
 て。それがキツケで交際がはじまり、夫婦  
 生活も来年で十年を迎えようとしています」  
 麻 里「（笑顔を作って）……」  
 博 巳「映画にドラマと脚本を書かせていただ  
 い。お里さんの後押しが、当時に既に有名女優だっ  
 た。お里さん、ありがとうございます。感謝の言葉しかあ  
 りません。」  
 司 会「会場から拍手が起きます。奥様へ感謝の  
 贈り物があつたので、さう取り出す博巳は、麻里の  
 リングを手取す。取り出す博巳は、麻里の  
 左手を薬指に取る。取り出す博巳は、麻里の  
 麻里の薬指に取る。取り出す博巳は、麻里の  
 だか、指輪のサイズが少し小さいので、博巳  
 かな。か入らない。アイズが少し小さいので、博巳  
 焦る。博巳と麻里。アイズが少し小さいので、博巳  
 会場も少し変な雰囲気になる。なんとか入  
 無理やり指輪を押し込む。なんとか入





博巳「……」  
指輪の外れない麻里の薬指は鬱血して紫色になつてゐる。その指を横目で見る博巳。

○メインタイトル「上辺だけの人」

○安達家のあるマンション・表（翌朝）

都心にそびえるタワーマンションが朝日を浴びてゐる。

○同・寝室

夫婦別のベッドで目を覚ます博巳。麻里はまだ寝ている。

○同・ベランダリビング

コーヒーを片手に、階下をのぞく博巳。マンション前に駐車している白いアルファードが見える。運転席から降りてきた堤有紗（25）と目が合い、軽く会釈し合う。起きてきた麻里が慌ただしく、支度を始める。

博巳「堤さん、もう待ってるよ」

と、伝える博巳は、タンブラーを渡す。麻里「（受け取りながら）わかってる」

台本をカバンに入れると、そのまま出て行く麻里。残される博巳。リビングには、二人の出会いのきつかけになつた低予算映画のポスターが飾られてゐる。

○堤の運転する車中

堤「毎朝、見送ってくれるなんて、ほんとイ旦那さんですよね」





中から、『没プロット』と書かれたフオ  
ルダを選択する。  
たくさんの没プロットを確認し、選び始  
める博巳。

選んだプロットの題名を『夫婦（仮）』  
に変更すると、それをメールに添付し、

博巳「送信する。」  
窓外はもう暗くなっている。

○映画制作会社・表（翌日）

都心に自社ビルを持つ大きな会社。

○同・打ち合わせ室

お茶を飲みながら待つている博巳。  
プロデュサーの後藤（トコ）と部下の箱

後藤「お疲れ様です。ニュース見ましたよ、

言いがら座る。後藤。箱崎は、昨日のプ

後藤「打ち合わせ先、配達会社でも話題にな

ってまして。今、安達さん、脚本、麻里さん

後藤「私も、それあり、いま、映画です。」

「いやいや、そんなとき、企画です。」

後藤「麻里さんの事務所に、軽いです。」

「よ。社長は結構乗気、みたいで、はしてま

博巳「そうですか。」

「安達さん、話したほうが本人にあ

博巳「それ、プロットも開かない。」

「箱崎もプロットを見

博巳「それ、プロットを見

「箱崎もプロットを見

○ 博巳の仕事場のアパート・室内（夕方）

後藤 箱崎部 後藤 開

正ウ藤達崎部 ばは小ト個  
 言直ケ「さん「 っ見「はトイ室  
 室い「たこん部 っ見「はトイ室  
 にな底スこ良長も かりこうで内便器  
 てが打トまくな言 だとや用を誰に  
 シらックといっ たらあ後足か座  
 ョ出てるで書思てま ならシ藤しな入  
 ク行く「いわ「したもんね。最近の安  
 をく「ちやかっ てるんだよ。前  
 受ける博巳。

○ 同・トイレ

後藤 後藤

と藤 後藤

へ出見会い「後藤  
 向口送積うで藤  
 かへるをこはと箱  
 う向後しとでま崎  
 。か藤、で、たに  
 うと出、よ目見  
 博箱崎へろ処送  
 巳はは向しかく見  
 は、部かうおえら  
 踵屋に博巳願た博  
 を返る。しまし打  
 して。すすち合  
 トイレ せ

○ 同・打ち合わせ室・前

博巳 後藤 博巳 後藤 博巳 宣二 後藤

「たて「き「「伝人「  
 「いみも「た「「的が「  
 「んてつ「い「「に手「  
 「でくと「な、そはが「  
 「さ自由とうでしはバ「  
 「い。発想つよちしチ「  
 「新しで、まっうねす「  
 「い安書きたいもの書  
 達さんを見  
 ロットは練  
 った

ノートPCの前で頭を抱えている博巳。  
その時、スマホが着信する。『ケンジ』とある。  
画面の着信表示は『ケンジ』とある。  
驚く博巳。『表示は』とある。  
電話を取れずにいると着信が鳴り止む。  
画面には『留守番メッセージが一件』と  
表示されておる。おそるおそるメッセージを聞いて  
博巳、おそるおそるメッセージを聞いて  
みる。『おそるおそる』とある。  
ケンジの声「久しぶり。急にごめんなさい。  
どうしても伝えなきゃいけないことがあるも  
の。アタシ、エイズ発症したの。あんたも  
念のため検査を受けて」  
博巳「スマホを耳から話す博巳は啞然とする。

○性病専門クリニック・待合室（翌日）

待合客が数人、長椅子に座って待ってい  
る。その中に紛れて、マスクにサングラス、  
ニット帽をかぶった博巳もいる。  
博巳「（気が気でない）……」  
受付の看護師に番号で呼ばれた博巳は診  
察室に向かう。

○同・診察室

匿名希望と書かれた問診票を見ている医  
師。検査動機の項目、『元パートナーが  
エイズを発症した』にチェックがされて  
いる。  
医師「元パートナーの方は異性ですか？ 同  
性ですか？」  
博巳「同性です」  
医師「最後の性行為の時期はいつ頃ですか？」  
博巳「十年ほど前です」  
医師「HIVに感染すると、数年から10年  
後にエイズを発症することが多いです。連



医師「状況次第では当然ありますよ？」

○同・表

ケンジの留守電メッセージをもう一度聞  
いている博巳。ケンジは咳込んでいる様子。  
よく聞くとケンジは

○博巳の仕事場のアパート・室内

博巳「PCの前でプロットを書こうとしている  
博巳だが、机に置かれたスマホが気がか  
りで集中出来ない。」  
博巳「仕方なくケンジに電話をかける博巳。」

○ケンジのアパート・表（翌日）

都心から少し外れた場所に位置する古い  
アパートの前にタキシードを着た博巳が、みすぼらし  
いタクシートを見ている。怪訝な表情。

ケンジの部屋の前の。×  
博巳、部屋番号を確認し、インターホン

博巳「その顔は、久しぶり」と頬がこけている。  
ジ（ゴ）が顔をす。×  
部屋の中央からタバタと音がして、ケン

○同・室内

物がごちゃごちゃと置かれた六畳間。  
小さなテーブルで向き合うように座って  
いる博巳とケンジ。  
ケンジ「（号泣）本当に、本当によかった。も  
配であんなに病気がうつしてたらと思ったら心







大きな大学病院。

○同・血液内科・診察室

平山「付き添う博巳。医師の平山（52）の診察を受けているケ

ね。咳と熱の原因は肺炎を併発して

とね。抗菌薬で対処していきまじやう。抗HIV薬

博巳「抗菌薬で対処しては死ぬ病気がなくなっ

たとえ聞いた発症しても本気で飲めば健

常者と変わらない生活を送ることか可能で

平山「私の患者では発症してからも20年経つ

方もいらっしゃいます。とてから元気が方で

旅行の度に土産をくれる。タペストリー。

ケン「診察室に貼られた多くのタペストリー。

平山「医師はケンジの首元のリンパ節を触る。

で、後日、再検査に来ていた。ただきいたです。

博巳「ケンジ「（少し笑って）……」

○同・タクシー乗り場

博巳「立ってタクシーを待っている。

ケン「近くのベンチに座って、その博

巳「見たタクシーにケンジを乗せる博巳。

ケン「それじゃ薬忘れずに飲みなよ？」

博巳「ドアから離れようとする博巳。

博巳「ちよつと、と呼び止めるケンジ。

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「（そっけなく）今日はありがとう」

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「（そっけなく）今日はありがとう」

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「（そっけなく）今日はありがとう」

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「（そっけなく）今日はありがとう」

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「（そっけなく）今日はありがとう」

ケン「（そっけなく）今日はありがとう」

博巳「（そっけなく）今日はありがとう」

○安達家のあるマンション・リビング（夕方）







アパートの表にタクシーが停まってい  
 る。パーティの部屋から連れ出し、タクシーに  
 乗せる。博巳。屋から連れ出し、タクシーに  
 エイズ拠点病院。×  
 エイズ拠点病院。×  
 造影剤の点滴を打ち、CT検査を受ける  
 ケンジ。×  
 診察室。×  
 医師が生検用に腫れているリンパ節の  
 一部を生検針で吸引する。×  
 痛そう。×  
 病院の会計受付。×  
 支払いをしようとした博巳は、明細に記  
 載された6万円という額に驚く。×  
 保険適用で、その額を支払いを済ませる  
 博巳。×  
 博巳の仕場のAIV感染者の障害者手帳  
 の取得についで調べている。×  
 障害者手帳がなければ区助成してくれ、  
 患者は少額の負担で済むとホームペー  
 ジに載せられている。×  
 スーパー。×  
 スーパー。×  
 スーパー。×  
 出しをしていいる博巳。×  
 ケンジのアパート・室内。×  
 ケンジのアパート・室内。×  
 食事のあと、薬をケンジに渡す博巳。  
 薬は10種類ほどある。×  
 ○ケンジのアパート・室内（夜）  
 寝ているケンジ。博巳は、本棚にあるア  
 ルバムを見つけていた。







堤里「ごめんなさい、私にはわかりません」

○ケンジのアパート・室内

病院にしかける準備している博巳。

顔色も少し良くなってきたケンジがスマ

ホを見ている。『2010年、女優の伊吹

ケンジ「……奥さんとは上手くいってるの？」

博巳「まあ普通だよ」

ケンジ「大事にしなさいよ。人間ひとりで生

きていけると思ったら大間違いなんだから」

博巳「ケンちゃんと言うながら再びスマホに目を落

とすケンジ。映画やテレビの脚本作品が

ウイキには、映画やテレビの脚本作品が

羅列されている。その脚本家として華や

ケンジ「あな、すごい脚本家なのねえ」

博巳「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

ケンジ「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

博巳「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

ケンジ「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

博巳「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

ケンジ「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

博巳「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

ケンジ「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

博巳「別にあな、すごい脚本家なのねえ」

博巳「はいはい。もう行くよ」

○エイズ拠点病院・診察室

平山「CT画像を見ている医師の平山。平山の前にはケンジが座り、その後ろに博巳も付き添っている。」

平山「首のリンパ節に腫瘍が見つかりました。悪性リンパ腫です」

ケンジ「（愕然として）……」

平山「いわゆる血液のガンとよばれるもので、HIV患者の方が併発しやすい病気です」

平山「CT画像の黒い影を指す平山。平山「ステージはⅡ期です。わりかし早期に発見できたことは幸運と言えます。抗がん剤治療を行なう入院していただきます。」

博巳「説明の間、終始ケンジは俯いている。」

○同・病室

看護士「ベッドに座っているケンジ。看護士「抗がん剤の準備をしますので、着替えてお待ちください。」

博巳「ま。ケンジは着替えようともせず、俯いたまま。」

ケンジ「はやく見つかってよかったって思。」

博巳「（励ます）……はやく見つかってよかったよ。」

ケンジ「あのほん、脚本家のよもったところ、気。」



博巳「……わかりました」

夜 ○博巳の職場のアパート・室内（日替わり）

博巳「打ち合わせのメモを確認している博巳。」

をパソコンに書き進めよう博巳は、

一息つく博巳は、カレンダーを見る。

明日はケンジの検査日だ。

○堤の運転する車中（夜）

麻里「（出て）どうしたの？」博巳だ。

博巳「作業するよ」

麻里「わかつた」

博巳「なに？あ、あとさ」

博巳「電話がそれじゃ」

堤「今の博巳さんが話しかけてくる。

堤「他になん？今日は帰れないって」

堤「あれ？おかしいなあ」

麻里「い、なに？」

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

○安達家のあるマンション・リビング（夜）





ケン 再度、驚くケンジ。  
ケンジ「(慌てて) あ、ああ。はじめまして。

大塚です」

ケン 博巳は博巳を見ている。

ケン 気まずい雰囲気の流れる。

ケン ジ「(無理な男口調で) オレ、ちよつと体

壊しちゃって。博巳君は昔の馴染みで、よ

く見舞いに来てもらってるんです」

麻里「変なので、心配で後を尾けてしまった様

子が「」

ケン 博巳「」

ケン 博巳「」

ケン 博巳「」

ケン 博巳「」

○ 同・表

病院から出てくる麻里。

その少し後ろをついて歩く博巳。

駐車場に停車した車の傍までやってきた麻

里「(鍵を探しながら) だった、あの人、ゲ

イでしよ? それくらい分かる」



博 麻 博  
「昔、付き合ってた人だよ」

博 麻 博  
「最近、病気がなかつた頃、養ってもらってた。それで

で、看病してた」

鍵が見つかり、車のドアを開ける麻里。

車を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

を押し込めようとするドア

博 麻 博  
「さ、無理やりにドアを閉める麻里は、車を発進

○安達家のあるマンション・リビング（夕方）

帰宅する博巳。

麻里の姿はない。

椅子に座る博巳は、スマホを取り出し、

麻里に電話をかける。

○同・地下駐車場

車に乗った麻里が呆然としている。

スマホが着信。博巳からだ。

無視する麻里。

麻里

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

頭を抱えている博巳。

玄関から物音がする。

博巳「麻里がリビングに入ってくる。」

博巳「（迎え受け）……」

麻里「あなた、今も男の人が好きなの？」

博巳「いや。それに、男と付き合ったのはケ







麻里「(イライラ)……………」

ケ ン 出 来 上 が っ た 料 理 を 並 べ る 麻 里 。  
×

ケ ン 煮 物 を 口 に 運 ぶ ケ ン ジ 。

ケ ン ジ 箸 が 進 ま な い 様 子 。

麻 里 「(イライラ) お 口 に 合 い ま せ ん か ? 」

ケ ン 里 「 ? 」

ケ ン 里 「 抗 が ん 剤 の 影 響 ね 。 食 べ 物 が 苦 く 感  
じ る の よ 。 食 欲 も 湧 か な い し 」

ケ ン 里 「 せ っ か く 作 っ て も ら っ た け ど 」  
と 言 い 、 箸 を 置 く ケ ン ジ 。  
ほ と ん ど 残 っ て し ま っ た 料 理 。

○ ケ ン ジ の ア パ ー ト ・ 玄 関 ( 夕 方 )

麻 里 が 玄 関 で 靴 を 履 い て い る 。

ケ ン ア ジ 見 送 り に 立 っ ケ ン ジ 。  
ケ ン 里 「 シ と 博 巳 の 間 に は な い わ よ ? 」

ケ ン 交 際 す る 前 の 話 だ し 。 博 巳 が 男 と 関 係 を 持  
っ た そ の も ア タ シ が 最 初 で 最 後 だ と 思 っ た 。

麻 里 「 あ な た に 関 わ る と わ か ら な い わ よ 、  
ア タ シ

ケ ン 麻 里 「 あ な た に 関 わ る と わ か ら な い わ よ 、  
ア タ シ

ケ ン 麻 里 「 あ な た に 関 わ る と わ か ら な い わ よ 、  
ア タ シ

ケ ン 麻 里 「 あ な た に 関 わ る と わ か ら な い わ よ 、  
ア タ シ

ケ ン 麻 里 「 あ な た に 関 わ る と わ か ら な い わ よ 、  
ア タ シ

○ 駅 前 ・ 道 ( 夕 方 )

麻 里 「 道 を 歩 く 麻 里 。

小さな本屋があることに気づく麻里。  
中へ入ってみる。

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

博巳 帰宅する博巳。

麻里 「おただいま」  
「おかえり」  
麻里は何冊かの本を広げ、熱心にメモを

取っている。題名は『抗がん剤と食事の工

夫』。

博巳 「（それを見て）……」

○ケンジのアパート・玄関（日替わり）

ドアを開け、玄関から顔を出しているケ

ンジの前には麻里。

驚くケンジにまた来るとは思わなかったわ

麻里 「スリーパーンの袋を見せる。」  
「麻里は丁寧に出汁を取っている。」

○ケンジのアパート・室内（日替わり）

キッチンで調理している麻里。

その姿を少し離れたところで見ているケ

ンジ 「……」

ケンジの前に料理を並べる麻里。

ケン 「……」

ケン 「……」

その姿を見て安堵した表情の麻里。







○ 同・廊下  
 麻里「立ち上がり、処置室を出て行く。博巳が急に  
 博巳「タシ、何にもない。ただろう。博巳が急に  
 ケ博「急に怖くなれは、本当に死ぬか。博巳が急に  
 ケ博「なだか、時期もあつた。ど思つたの。この歳に  
 ケ博「と、か、子、育、て、ら、か、無、縁、じ、や、な、い、？、落、ち、込、ん、だ、と、思、つ、た、の、に、こ、の、歳、に  
 ケ博「ち、や、つ、て、ア、タ、シ、な、ん、だ、か、昨、日、怖、く、な  
 ケ博「ポ、付、治、ベ、頭、ケ、部、  
 ケ博「ないから、これ、で、隠、し、て、る、の、み、つ、と  
 ケ博「（驚いて）……」  
 ケ博「（笑つて）覚悟はしてたけど、いざな  
 ○ エイズ拠点病院・処置室  
 気丈に振る舞うケンジ。「」



麻里「博巳と麻里も乗り込む。ちよつと寄り道していき

ケン「せんか？」

ケン「麻里は答えず微笑むだけ。」

○スタイリスト会社の入ったビル・表

ケン「その青山にあるモダンなビル。」

麻里「ほら、催促され車を降りるケンジ。」

○同・室内

麻里「引張られ、スタイリスト会社へ通されるケンジ。男性スタイク室へ連れて行かれる。大きなスタイクの吉岡（43）が待っている。」

吉岡「もー、いくらなんでも急過ぎじゃない？」

麻里「どうせ暇してたんでしょ？ 社長」

吉岡「社長はやめて削られるの？」

ケン「面食らうケンジは、借りてきた猫のよう

麻里「この人、私の専属メイク。いつの間に

吉岡「青山に会社構えや経営手腕がすごいだけ」

麻里「（無視して）用意できた？」

吉岡「（室外に呼びかけ）全部持ってこさせてる。」



麻ケ 麻ケ 麻ケ 麻ケ  
 里ン 待里ン 出里ン 里  
 「ジ さ 「ジ た 「ジ 「麻 ウ  
 や 「れ あ 「の 結 「ね 里 イ  
 っ さ て れ そ つ 構 な え が ッ  
 ぱ れ な の り て 前 に 、 ベ グ  
 り た か 舞 や 知 に ? ひ ン を 被  
 「 わ っ 台 、 っ 、 「 と チ っ 被  
 よ た 挨 ね て あ の 聞 座 た っ 座  
 、 ? 拶 え る 人 が 書 いた 映画 に 私 が  
 行 「 の 「 ? 「 書 いた 映画 に 私 が  
 かな 、「 ケ ン ジ さ ん 、 招

○ エ イ ズ 抛 点 病院 ・ C T 室 前 (日 替 わり)

博 巳  
 「 サ 中 そ つ 寝 博  
 : イ に れ い 室 巳  
 : ズ は は に に 、  
 「 の 、 リ 見 あ 何  
 合 い ン つ る か  
 わ い グ け る 棚 を 探  
 な 夫 ケ ー 博 ゴ し て  
 指 の 日 だ 。 ゴ ソ と 探 っ て い る 。  
 輪 に プ レ ゼ ン ト し た  
 が 入 っ て い る 。

○ 安 達 家 の あ る マ ン シ ョ ン ・ 寝 室 (夜)

博 巳  
 「 麻 助 運  
 : 里 手 転  
 : 。 席 し て  
 「 には い る 博 巳 。  
 疲 れ て 眠 っ て し ま っ て い る

○ 博 巳 の 運 転 す る 車 中 (夕 方)

ケ 麻 ケ  
 ン ん 里 ン こ  
 く だ 「 ジ け  
 の メ : 「 ン :  
 泣 く の イ : そ ん な  
 そ う の を が 台 無 し 言 わ れ たら 、 せ っ か  
 笑 麻 里 。 我 慢 す る ケ ン ジ 。 や な い の 「  
 そ の や り と り を 見 て い る 博 巳 。

ケンジ「やっ？」

ケンジ「あの日によ？」

ケンジ「あの日、満員の観客のなか、一番いい席だけが見てた」

ケンジ「モヤモヤしてた。それこそ10年間ずっと」

ケンジ「悪かったわね」

ケンジ「どうぞとケンジに伝える。」

ケンジ「これから長い付き合いになるんだから覚悟しなさいよ」

○同・CT室

ケンジ「CT撮影を受ける。横たわるケンジ。」

○安達家のあるマンション・リビング（夜）

麻里「そこへ、博巳が帰宅する。」

博巳「ケンジさんの腫瘍ね、小さくなった」

博巳「そっか、よかった」

博巳「あと、また検査だった。最後の抗がん剤治療のあと、また検査だった」

博巳「夕方飯までもう少しだから、先にお風呂入ったら？」

博 巳 「うん」  
博 巳 「料理に戻る麻里。」

麻 里 「あのさ」  
博 巳 「ん？」  
博 巳 「明後日の夜って何か予定ある？」

麻 里 「別にないけど」  
博 巳 「どこか出かけない？」  
博 巳 「食事とか」

博 巳 「そうしょいけどあ、お風呂入るよ」  
麻 里 「：：いいけどあ、お風呂博巳。」

驚いてくさとう風呂場へ向かう博巳。  
驚いている麻里は、少し嬉しそうに料理  
に返る。

○ ブティック（日替わり）

高級ブランド店にて、麻里が店員に服を  
見立ててもらっている。

○ 駅前・ジュエリーショップ

博 巳 が店内に入っていく。  
控えの紙を渡すと、店員が奥からリング  
ケースを持ってくる。

○ 安達家のあるマンション・リビング（夜）

よそ行きの服を着た博巳がソファに座っ  
ている。

ポケットからリングケースを取り出し、  
中身を確認しようとする。

ちようど麻里が寝室から出てくる。

慌ててポケットへしまおう博巳。

麻 里 「おまたせ」  
麻 里 は綺麗に着飾っている。

博 巳 「（見惚れて）……」

麻 里 「なんか言うことないの？」

博 巳 「あ、ステキだよ」

麻 里 「（笑って）あなたもね」

○ タクシー・車内（夜）





麻里「だから、この間はごめん。心がないな

博「ん：言：つ：て」

麻里「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」

博「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
複雑な表情の博巳は、リングケースを渡すことができない。

○安達家のあるマンション・寝室（翌朝）

夫婦別のベッドで目を覚ます博巳。

麻里はまだ寝ている。  
その寝顔を見る博巳。

○電車内

座席に座っている博巳。

○博巳の仕事場のアパート・室内

P Cの前で作業している博巳。  
プロットを無心に書き進めている。

入力する。終わりに『おわり』の文字を  
その表情は浮かさない。

博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」

文章が段々と消えて行く。

真っ白になつた画面。

○エイズ拠点病院・診察室（日替わり）

C Tの画像を、P Cに表示させる平山。

博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
その前には緊張の面持ちのケンジ。

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」

平山「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」  
博巳「ん：あ：な：た：に：も：ち：ゃ：ん：と：心：が：あ：る」



○映画館・劇場内（十年前・回想）  
 舞台挨拶中の博巳と麻里。

博巳：「結婚して、たけんじさんが来ても、私たちが  
 麻里：「あの日、ケンジさんが来るの待ってた  
 博巳：「よし、あんな前、舞台挨拶の日、覚えてる？」  
 麻里：「うん、十年前の、覚えてる？」  
 博巳：「ねえ、博巳、聞いて、握手している？」  
 麻里：「博巳、うん、握手している。」  
 博巳：「よ、無理して飲むから、そんなになるんで  
 麻里：「博巳、隣の座に麻里が、そんなになるんで  
 ケンジ：「たのしみにお店、さービスすること  
 麻里：「店前の階段に酔っ払いが落ちている、私達もタ  
 ケンジ：「タクシーを捕まえる麻里。」  
 ○同・表（夜）

博巳：「うん、感謝してる。そういうことに気づか  
 せ、てくれ、麻里。」  
 涙ぐむ。泣いては、グイッと酒を流し込  
 呆然とする。博巳は、グイッと酒を流し込  
 呆然とする。博巳は、グイッと酒を流し込

博巳は、ひとつだけ空いた席を見つめて

麻里「あの、安達さん？」

博巳「（気づいて）はい？」

麻里「ラストシーン、主人公が彼女を追いか

けたのかどうかで訊いてたんですけど」

博巳「ああ。どうでしょう……」

博巳「空席を見ている博巳。ただ……」

博巳「ただ、ホッとしたんじゃないですかね。彼女が出て空席から目を外し、麻里のほうを

○元のバー・表（夜）

博巳「泣き止まないでいる」

麻里「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

○安達家のあるマンション・リビング（翌朝）

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」

博巳「泣き止まないでいる？」



後藤「後藤と箱崎の前に座っている博巳。困りま

すよー頭を下げている博巳。

博巳「申し訳ない」

後藤「じゃなく面白企画になつてきたところ

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

博巳「僕はもう書けませんか」

後藤「僕はもう書けませんか」

○同・前の道（夕方）

とぼとぼと歩いてくる博巳。  
マンションの前につく。博巳。  
博巳、中に入るのを躊躇う。

○同・リビング（夕方）

麻里のスマホが着信する。

博巳からの電話だ。

麻里「電話に出る麻里。」  
博巳「声：「ごめん、今まで」

○同・表前の道（夕方）

博巳「マンション前で電話している博巳。」

麻里「声：「悪かった」プロット読んだ」

○同・リビング（夕方）

博巳「声：「そう」

麻里「この続きはどうするの？」  
博巳「声：「辞退したよ。もう脚本も書かない」

麻里「電話が切れる。」  
「何かを感じてベランダへ出る。」

階段下を見下ろす。ここでは博巳の姿はない。  
しかし、もうそこには博巳の姿はない。

○ケンジのゲイバー（日替わり）

ほこりっぽい店内。

一人再オープン準備をする。グラスを洗。

入り口のドアが開く音が進められている。

入り口のドアが開く音が進められている。

入り口のドアが開く音が進められている。

入り口のドアが開く音が進められている。

入り口のドアが開く音が進められている。





麻里 指輪が入っていると、いい夫婦の日に渡された  
薬指にははめてみる。  
サイズがぴったりになっている。

○喫茶店（日替わり）

新人脚本家の高野が緊張の面持ちで座つて  
いる。その前には、脚本を読んでいる博巳。  
丁寧には一枚一枚読んでいる。

博巳（読み終わり）「すごく良くなった」

博巳「驚く高野は、喜びを噛み締めている。  
「ただ、僕の脚本監修のクレジットは外  
してほしい」

高野（落胆）「……わかりました」

博巳「あ、違うよ。脚本は本当に良かった」

博巳「偉そうなことを色々言ってたけど、結  
局、僕が一番、人を描けてなかったから、ちや  
んと人と向き合ってたから」

高野「と人とは向き合ってたから」

博巳「だから、僕のクレジットなんていらな  
いんだよ。無いほうがいいから」

高野「そんなこと言わないでください」

博巳「僕は安達さんの作品が好きで、脚本を  
書き始めたんですけど、だから、そんなに

博巳「……」

○博巳の仕事場のアパート・室内

床に横になつて、博巳。  
散らばつた台本を見つめている。  
インタビューホン  
のモニターを立ち上げ、インタビュー  
プロデュースの確認する。後藤が映っている。



夜読み。読み終わった脚本を本棚にしまおう博巳。

複数本の脚本を本棚に返している。床に落ちた脚本の中、また

一冊手に取ると、読み始める。×

夜明け。×

博巳「最後の一冊を本棚に戻す博巳。」

博巳「本棚に並べられた脚本群を見つめる。」

○同・ベランダ（早朝）

ベランダに出る博巳。冷たい空気が、大きく息を吸い込む博巳。

何かが決まると、息を吐く。朝日がゆっくると、昇りつつある。

○同・室内（朝）

部屋に戻る博巳はPCを開く。真っ白な画面に文章を打ち込んでいく。指を動かして

いそぐ。○

○映画制作会社・打ち合わせ室（日替わり）

デスクの上に完成したプロットが置かれて

後藤「プロット、読ませてもらった博巳。」

後藤「それで、」

博巳「（遮るように）後藤さん、ひとつだけ、

後藤「？はいですか？」

博巳「このプロットなんです。僕の昔の恋人が病気の

験を元にしています。僕が、実は僕が病気の

になつて、妻に隠れてケアをしていたんで、す。それが、知った妻は複雑な思ひだつたで、し。よ。う。が、そのケアを手伝つてくれました。おかげで病氣は治りました」

博 藤 脚 色 は ほんどしていません。僕の愚

かさも周囲の優しさも、ありのままを書

後 藤 内容がダメなら、この企画はやはり無しに

博 藤 じゃあ、いまはいいんです」

後 藤 誠実に頭を下げる博。プロットで脚本に着手

博 藤 じゃあ、いまはいいんです」

後 藤 じゃあ、いまはいいんです」

○ 博 巳の職場のパート・表（夕方）

歩いてくる博。アパーの郵便受け、自分のポスト

をパケトの封筒が入っている。

○ 同・室内（夕方）

封筒を開ける博。中。は。便箋と、映画のチケットが入って

いる。十年前に博巳が初めて脚本を手

がけた低予算映画のバイバル上映のチ

ケットだ。博巳。

便箋を開く博巳。

短文章が書かれていない人間だつてこと

は。知。つ。て。る。わ。』

○ケンジのゲイバー（夕方）

再オーブンして置いたケンジ。  
入り口に外看板を設置している。  
自分の声が聞こえる。  
以前、馴染み客がやってくる。  
その客と笑顔を交わす。  
「あの声、みても、ひと選ぶべきじゃな  
い。あんた、さういふ人間にかけられ  
る。お客の対応を、うしろ向きに  
笑う。」「あ、んた、劇場前で見たとき  
から、その

○博巳の仕事場のアパート・室内（夕方）

読み終える博巳。  
封筒の中、一枚の映画のチケット  
が入っている。十年前にケンジに渡した  
そのチケット。十年前にケンジに渡した  
色の褪せている。綺麗な保存さ  
れ、その古いチケットを見つめる。

○映画館近くの道（十年前・回想）

チケットを持って来た博巳の姿。  
映画館近くまでやって来ると、博巳の姿  
が見える。近づくと、博巳の姿が、  
急に足をとめる。ケンジだったが、  
「ケンジ、早く、博巳の姿を遠くから  
見つけよう。」

ケ  
ン  
に話しかける。劇場内から出てきて、博巳  
劇場内に入ろうとしない博巳を、強引に  
中へ連れて行く。麻里は、踵を返し、もと  
それを送る。ケンジは、踵を返し、もと  
来た道に戻る。

○博巳の仕事場のアパート・室内（夕方）

大事に保管されていたであろう映画のチ  
ケットを見つめる博巳。  
その目から涙が溢れる。

○名画座・前（夜・日替わり）

名画座にやってくる博巳。  
ポスターが貼られて、十年前の映画の  
そのポスターが貼られて、十年前の映画の  
へ足を運ぶ。を見つめる博巳は、劇場内

○同・劇場内

スクリーンに投影される映像。  
アンパルトに住む若いカップルの別れの  
シーン。演じる大きな荷物を持って出て  
行く。送る男は部屋に戻って座る。  
部屋に置き忘れられた女の傘。  
それにも気づいた男、ただその赤い傘を見つ  
め、出て来ず、ただその赤い傘を見つ  
め、エンディングが流れ始める。  
暗転している。×  
上映が終わり、劇場内が明るくなる。  
観客の数は少ない。×  
その観客が少なく、劇場内が明るくなる。  
て立ち上がる博巳。×

麻博麻博麻博  
里巳里巳里巳

笑「「「「「し博驚麻つまた遠麻麻走て博立「と  
う：そ：映え：ば巳く里いにいたく里里る行巳ち：ぼ  
博：っ：画？：らは麻のに走に麻探姿は。道のい  
巳主かよ`「どく息里前に追り麻す博見。ほ  
。演「かどう沈切。立つく博。巳。が見えた。  
のっただった？「。の女優がね「

博  
巳

「と博麻立麻博  
：ぼ道巳里ち里巳が  
：と歩はの尽く背の中博  
「ぼときめ中は博巳  
歩出たかどん。よう  
くすの。うに離れて  
博。の。よん。れ  
巳の。うん。い  
足。に。く。く。  
。麻里とは反対

○  
同・  
前  
の  
道

麻るそ自劇  
里。の。分場内  
は。手。の。少  
出。に。は。し  
口。は。ピ。前  
を。ン。を。出  
出。ク。歩。て  
て、色。く。博  
外。の。麻。巳  
へ。封。里。の  
歩。筒。姿。を  
き。が。見。つ  
出。握。つ。け

○  
同・  
出  
口  
前  
の  
ホ  
ー  
ル

博巳「今、また脚本を書こうと思ってる。あ  
なたが読んだプロットを直したんだ」  
麻里「そう」  
博巳「よかったら、いろいろ教えてほしい」  
麻里「……」  
博巳「あなたのことがかちゃんと知りたいんだ」  
麻里「博巳を見つめる博巳。  
博巳を見つめる麻里。」  
麻里「その脚本、私が主演なんでしょうね？」  
博巳「もちろん」  
笑う二人は一緒に歩き出す。

おわり